

# 続・ 珈琲の思い出 23

いよいよ金曜日の夜がやってきた。

和樹は19時の約束に何が何でも遅れるわけにはいかないと、今日は朝から必死の形相でもって仕事を片づけていった。だから、同僚からの飲み誘いの愛想なく断って、

【炭火焼・美鳥】に20分前にたどり着いた時には、すでに息切れがしているほどだった。

店員にカウンター席まで案内され、やっと一心地ついてまわりを見回してみた。初めて来た店だったが、インターネットの評判通りの感じの良い店だった。

白で統一された店内に、ほどよく灯りを落とされた照明。

早く優子が来ないかな。早く会いたいな。早く優子の顔が見たいな・・・そればかり考えていたら、優子が現れた。

淡いグレーのウールのスカートスーツに、白いふわふわしたマフラーを巻いている。

・・・あ、相変わらずかわいい!

和樹が手を振って合図をすると、優子が満面の笑みを浮かべながら小走りにやってきた。

「和樹さん、こんばんは!お待たせしてごめんなさい!」

「いえいえ、まだ5分前ですよ、大丈夫!ほら、こちらへどうぞ。」

和樹の左側の席に腰掛けながら、優子は言った。

「わあ、素敵なお店ねえ!予約して下さってありがとうございます。」

カウンターの中で一人ずつ焼いてくれる方式の店だったが、炭火焼の店とは言え、テーブルの真上に強力な換気扇がついているため、匂いが髪や洋服について困る、ということはないさそうだった。

「優子さん、お飲物は何にしましょうか?僕はとりあえず生ビールにしますが」

「え?あ、じゃあ私も生ビールをお願いします」(続く)

鈴木優子